続で中等度以上群と大きな差が認められ、これが軽度群の認知記憶機能の１つの特徴であると考えられた。

（９）１日の中の気分の変動

軽度群では「少ない」76.6%、「変動しやすい」20.7%、「変動が大きい」2.7%であった。中等度以上群では「少ない」51.8%、「変動しやすい」35.2%、「変動が大きい」13.0%であり、有意差が認められ、軽度群では気分の変動が少ない人も多いことが示された。

（１０）30分程度の我慢（点滴・歯医者など）

軽度群では「我慢できる」76.4%、「できることもある」20.2%、「できない」3.4%であった。中等度以上群では「我慢できる」42.3%、「できることもある」37.3%、「できない」20.4%であり、「我慢できる」において30%以上の大きな差が認められた。軽度群では「できない」は3.4%と非常に少なく、持続する作業への参加についての可能性を示唆している。

（１１）環境の変化への対応

軽度群では「適応できることが多い」46.3%、「少し混乱しやすい」50.1%、「激しく混乱する」3.6%であった。中等度以上群では「適応できることが多い」24.2%、「少し混乱しやすい」60.9%、「激しく混乱する」14.9%であっり、「適応できることが多い」割合に20%程度差が見られた。

５　活動と意欲(表５)

（１）自発的な活動性

軽度群では「よく動く」38.8%、「少し動く」44.4%、「ほとんど動かない」16.8%であった。中等度以上群では「よく動く」30.9%、「少し動く」38.1%、「ほとんど動かない」31.0%であり、有意差が認められたが、割合の差はさほど大きくなかった。

（２）全般的な意欲・活力

軽度群では「いつも意欲がある」26.0%、「意欲が低いときがある」63.0%「ほとんどない」11.1%であった。中等度以上群では「いつも意欲がある」13.9%、「意欲が低いときがある」51.5%「ほとんどない」34.6%であり、有意差が認められた。軽度群でも「意欲が低いときがある」者が60%を超えており(中等度以上では70%超)、意欲向上への働きかけが重要であることが示唆された。

（３）集団活動への参加

軽度群では「自発的に参加」30.3%、「促せば参加」66.4%、「参加しない」3.3%であった。中等度以上群では「自発的に参加」14.8%、「促せば参加」70.2%、「参加しない」14.9%であった。「自発的に参加」で軽度の方が15%程度割合が多く、「参加しない」割合は軽度では3.3%にすぎなかった。集団的活動への参加意欲への高さを示している。

（４）個人作業への参加

軽度群では「自発的に参加」24.8%、「促せば参加」68.2%、「参加しない」7.0%であった。中等度以上群では「自発的に参加」11.1%、「促せば参加」66.1%、「参加しない」22.9%であった。「自発的に参加」で軽度の方が13.7%割合が高く、「参加しない」割合は7.0%と集団作業よりもやや高かった。

（５）作業の模倣（ものまね）ができる

軽度群では「まねしてできる」63.3%、「まねをするが困難」27.5%、「まねをしない」9.3%であった。中等度以上群では「まねしてできる」31.9%、「まねをするが困難」41.4%、「まねをしない」26.7%であった。「まねしてできる」割合が軽度の方が30%以上大きいのが特徴であり、介護予防的な介入方法を考える上

で活用可能な能力であると考えられる。

（6）健康への関心

軽度群では「高い」15.2%、「ふつう」49.3%、「少ない」22.3%、「わからない」13.1%であった。　中等度以上群では「高い」7.4%、「ふつう」24.0%、「少ない」20.6%、「わからない」48.0%であった。「わからない」割合は、軽度群で小さく、「わからない」と「少ない」をあわせると約30%であった（中等度以上は68%）。

（7）本人の生活の希望や目標

軽度群では「明確で、周りも理解している」35.2%、「あるようだが、周りは理解していない、しづらい」33.6%、「わからない、聞いたことがない」31.2%であった。中等度以上群では「明確で、周りも理解している」18.1%、「あるようだが、周りは理解していない、しづらい」27.3%、「わからない、聞いたことがない」54.6%であった。軽度群では、中等度以上と比較すると理解度が高いが、それでも3つの選択肢にはそれぞれ3割程度ずつ分散しており、介護予防ケアマネジメントで重視している本人の希望や目標の理解には特別の配慮が必要であると考えられる

（8）調査日に参加した活動

軽度群では「健康維持・体操」84.9%、「ゲーム」74.3%、「創作・手芸」30.2%、「音楽（聴く・歌う・踊る）」52.4%、「会話・語らい」75.6%、「園芸・耕作」1.9%、「家事・炊事」6.5%、「散策・外出」9.6%、「その他」4.4%であった。中等度以上群では「健康維持・体操」74.4%、「ゲーム」63.9%、「創作・手芸」21.5%、「音楽（聴く・歌う・踊る）」51.5%、「会話・語らい」64.5%、「園芸・耕作」1.7%、「家事・炊事」4.7%、「散策・外出」11.0%、「その他」6.3%であった。

「健康維持・体操」「ゲーム」「創作・手芸」「会話・語らい」では軽度群と中等度以上群の間に有意差がみられた。

（9）本人が好きな活動

軽度群では「健康維持・体操」39.6%、「ゲーム」45.7%、「創作・手芸」24.7%、「音楽（聴く・歌う・踊る）」39.7%、「会話・語らい」63.5%、「園芸・耕作」9.8%、「家事・炊事」7.5%、「散策・外出」19.8%、「その他」4.7%であった。中等度以上群では「健康維持・体操」27.1%、「ゲーム」35.5%、「創作・手芸」17.1%、「音楽（聴く・歌う・踊る）」41.0%、「会話・語らい」43.8%、「園芸・耕作」5.6%、「家事・炊事」5.3%、「散策・外出」20.2%、「その他」9.3%であった。

「健康維持・体操」「ゲーム」「創作・手芸」「会話・語らい」、「園芸・耕作」で軽度群と中等度以上群の間に有意差がみられ、差が見られた項目は、参加している活動とほぼ一致していた。

D　結論

軽度群では、ほとんどの項目において中等度以上群と比べて、全体的に認知記憶機能が高く、コミュニケーションが良好であり、生活上の自立が高いという結果であった。

しかし、家の外の自立歩行は58%、家の中の自立歩行は65%に過ぎず、車いすの利用者は家の外で2%、家の中で0.9%と極めて少ないものの、杖や歩行器、伝い歩きなどの状態にある者が30%以上おり、歩行機能について機能向上を図ることによって自立度が向上する可能性が示唆された。

家事や社会的手続きについては持っている能力の評定が、現在の実行状況よりも高く、

いろいろなことができる能力があるにもかかわらず、それを活かす状態にない場合もあり、生活の自立を高める余地があり得ることが推察される。一方で入浴や洗身には4割以上が何らかの介助を必要としており、こうした支援をしつつ自立を高めていくことが求められる。

ＢＰＳＤについても全体的に軽度群の方が該当者が少なかったが、項目によって中等度以上との差の現れ方に違いが見られた。例えば、「同じ話を繰り返す」、「職員の顔と名前を忘れる」、「感情不安定」は軽度でも60％以上が該当しており、「トイレなどの場所を忘れる」、「被害妄想」、「作り話をする」、「歩き回る」、「作り話をする」は軽度でも25～30%が該当しており、それぞれの該当率や中等度以上との違いに応じて、介護モデルを構築するために考慮しなければならないと考えられる。

記憶やコミュニケーションの能力も全体としては中等度以上に比べれば高い傾向があり、介護予防に欠かせない意思の疎通が可能な利用者も多いことが明らかになった。しかし、中間的な選択肢に該当する利用者も 20～40％程度おり、認知記憶機能やコミュニケーションの低下について整理し、低下のパターンに応じた介護モデルを考慮すべきであろう。また、作業の模倣が可能であるという点については、中等度以上と比べて極めて良好であり、さまざまな新しい取り組みに参加していく際に有効活用が可能であると考えられる。

活動性や意欲についても、全体的には中等度と比べて高いものの、最も活動性が高い選択肢への該当者は20～30％程度にとどまり、40～60％は中間的な選択肢（少し・・・、促せば・・・、ときどき・・・など）に該当しており、意欲や活力向上への働きかけが必要であることが示された。

以上のように、軽度認知症高齢者の状態像は中等度と比べて、自立性が高いものの、即現行の介護予防サービスの適用が可能であるとは言えず、認知症による諸症状やそれによる生活や行動上の障害に配慮しながら、身体機能や生活機能の自立を高める働きかけが必要であると考えられる。また、状態像の幅も広いことが示されており、1 つの介護モデルではなく、状態像のパターン別のモデルを構築することを提案したい。

表1.
解析対象者(通所介護)の基本的属性

			要支援・要介護1		要介護2～要介護5	
			人数	%	人数	%
基本属性	要介護度	要支援	164	17.5	0	0.0
		要介護1	776	82.6	0	0.0
		要介護2	0	0.0	367	45.4
		要介護3	0	0.0	274	33.9
		要介護4・5	0	0.0	168	20.8
		合計	940		809	
	性別	男	194	20.6	243	30.0
		女	741	78.8	563	69.6
		記入なし	5	0.5	3	0.4
	平均年齢 (SD)		83.5 (6.1)		83.7 (6.6)	
	認知症高齢者自立度	Ⅰ	311	37.6	59	8.4
		Ⅱ	440	53.1	212	30.2
		Ⅲ	63	7.6	287	40.8
		Ⅳ	13	1.6	118	16.8
		M	1	0.1	27	3.8
	障害老人自立度	自立	168	22.2	68	11.2
		J	357	47.2	139	22.9
		A	219	28.9	264	43.5
		B	13	1.7	112	18.5
		C	0	0.0	24	4.0
	認知症のタイプ	1.アルツハイマー型の認知症	214	26.7	278	38.4
		2.脳血管性の認知症	198	24.7	194	26.8
		3.その他	72	9.0	60	8.3
		4.不明・特定できず	317	39.6	192	26.5

表2.
通所介護利用者のADL／IADL

			要支援・要介護1		要介護2～要介護5		該当率の差
			人数	%	人数	%	%
ADL/IADL	麻痺 *	あり	96	10.2	122	15.1	−4.9
	(左・右、上・下肢)	なし	844	89.8	684	84.5	
	日常に支障をきたす筋力低下 *	あり	285	30.3	318	39.3	−9.0
	(左・右、上・下肢)	なし	655	69.7	486	60.1	
	視力の低下	1.かなり見えにくい	36	4.0	41	5.4	−1.4
		2.やや見えにくい	318	35.3	270	35.6	−1.8
		3.見える	548	60.8	447	59.0	
	聴力の低下	1.かなり聞こえにくい	91	10.0	95	12.3	−2.3
		2.やや聞こえにくい	306	33.6	257	33.3	−2.0
		3.聞こえる	515	56.5	421	54.5	
	家の外での歩行・移動 *	1.自立歩行	533	58.3	403	52.4	5.9
		2.杖歩行	290	31.7	168	21.9	15.8
		3.歩行器	72	7.9	61	7.9	15.7
		4.車いす	19	2.1	137	17.8	
	室内での歩行 *	1.自立歩行	591	65.0	420	54.6	10.4
		2.伝い歩き	150	16.5	150	19.5	7.4
		3.杖歩行	129	14.2	72	9.4	12.2
		4.歩行器	32	3.5	51	6.6	9.1
		5.車いす	8	0.9	77	10.0	
	介助が必要な生活行為 *	1.摂食	41	4.4	178	22.0	−17.7
	(複数回答可) *	2.排泄	130	13.8	444	55.0	−41.1
	*	3.入浴	392	41.8	590	73.0	−31.3
	*	4.洗身	495	52.7	629	77.9	−25.1
	家事(現在の状態) *	1.自分でしている	82	8.9	10	1.3	7.6
		2.少ししている	275	29.7	80	10.0	27.3
		3.ほとんど・全くしていない	570	61.5	712	88.8	
	家事(持っている能力) *	1.自分でできる	117	12.7	23	2.9	9.8
		2.少しできる	479	51.8	224	28.1	33.5
		3.ほとんど・全くできない	328	35.5	550	69.0	
	社会的手続や金銭管理(状態) *	1.自分でしている	119	12.9	26	3.3	9.6
		2.少ししている	261	28.2	64	8.0	29.8
		3.ほとんど・全くしていない	545	58.9	711	88.8	
	社会的手続や金銭管理(能力) *	1.自分でできる	104	11.3	28	3.5	7.8
		2.少しできる	342	37.1	85	10.6	34.3
		3.ほとんど・全くできない	475	51.6	686	85.9	
	更衣や整容(能力) *	1.自分でできる	493	52.8	152	19.0	33.8
		2.少しできる	382	40.9	385	48.2	26.5
		3.ほとんど・全くできない	59	6.3	262	32.8	
	電話をかける(能力) *	1.自分でできる	274	30.2	70	8.8	21.4
		2.少しできる	303	33.4	127	15.9	38.9
		3.ほとんど・全くできない	330	36.4	600	75.3	

*:p<.05

注 該当率の差は軽度の該当率－中度以上の該当率。
該当率の差が2段書になっている項目は、上段が選択肢1への該当率の差、下段が選択1＋2の該当率への差を示している。同様に3段書になっている項目では、上段が選択肢1への該当率の差、中断が選択肢1＋2の該当率の差、下段が選択肢1＋2＋3の該当率の差を示している。
麻痺、筋力低下は「ある」への該当率の差、介助が必要な生活行為は各項目に対する該当率の差を示している。

表3.
通所介護利用者のBPSD等

			要支援・要介護1		要介護2～要介護5		該当率の差
			人数	%	人数	%	%
	被害妄想 *	1.よくある	70	7.5	124	15.6	-8.1
		2.ときどきある	260	27.9	288	36.1	-16.3
		3.ない	602	64.6	385	48.3	
	暴言 *	1.よくある	21	2.2	92	11.5	-9.2
		2.ときどきある	137	14.6	216	26.9	-21.5
		3.ない	781	83.2	495	61.6	
	暴力行為 *	1.よくある	5	0.5	33	4.1	-3.6
		2.ときどきある	36	3.9	109	13.6	-13.4
		3.ない	889	95.6	657	82.2	
	感情不安定 *	1.よくある	79	8.4	181	22.5	-14.1
		2.ときどきある	364	38.8	363	45.2	-20.4
		3.ない	495	52.8	260	32.3	
	大声・奇声を上げる *	1.よくある	8	0.9	70	8.7	-7.9
		2.ときどきある	56	6.0	150	18.6	-20.5
		3.ない	872	93.2	585	72.7	
	歩き回る *	1.よくある	71	7.6	222	27.7	-20.1
		2.ときどきある	163	17.4	204	25.4	-28.1
		3.ない	702	75.0	377	47.0	
	家に帰りたがる *	1.よくある	54	5.8	187	23.3	-17.5
		2.ときどきある	130	14.0	179	22.3	-25.8
		3.ない	745	80.2	437	54.4	
	同じ話を繰り返す *	1.よくある	246	26.4	309	38.5	-12.1
		2.ときどきある	355	38.1	268	33.4	-7.4
		3.ない	332	35.6	226	28.1	
	作り話をする *	1.よくある	65	6.9	130	16.3	-9.4
		2.ときどきある	158	16.9	188	23.6	-16.1
		3.ない	713	76.2	478	60.1	
	異食をする *	1.よくある	6	0.6	33	4.1	-3.5
		2.ときどきある	9	1.0	73	9.1	-11.7
		3.ない	922	98.4	694	86.8	
	排泄物をさわる *	1.よくある	2	0.2	25	3.1	-2.9
		2.ときどきある	28	3.0	96	12.0	-11.9
		3.ない	908	96.8	680	84.9	
	昼夜が逆転している *	1.よくある	16	1.7	56	7.0	-5.3
		2.ときどきある	105	11.3	230	28.9	-23.0
		3.ない	812	87.0	510	64.1	
	他人のものを収集する *	1.よくある	23	2.5	67	8.4	-5.9
		2.ときどきある	52	5.5	129	16.1	-16.4
		3.ない	863	92.0	606	75.6	
	ものを壊す *	1.よくある	2	0.2	17	2.1	-1.9
		2.ときどきある	18	1.9	51	6.4	-6.3
		3.ない	913	97.9	734	91.5	
	職員の顔と名前を忘れる *	1.よくある	265	28.7	455	57.8	-29.1
		2.ときどきある	402	43.6	222	28.2	-13.8
		3.ない	256	27.7	110	14.0	
	家族の顔を忘れる *	1.よくある	16	1.7	97	12.3	-10.6
		2.ときどきある	69	7.4	191	24.3	-27.5
		3.ない	848	90.9	498	63.4	
	トイレなどの場所を忘れる *	1.よくある	54	5.8	249	31.3	-25.5
		2.ときどきある	209	22.3	239	30.0	-33.3
		3.ない	675	72.0	308	38.7	

*:p<.05

注 該当率の差は軽度の該当率－中度以上の該当率。
該当率の差が2段書になっている項目は、上段が選択肢1への該当率の差、下段が選択1＋2の該当率への差を示している。「よく見られる表情」については、各表情ごとの該当率の差を示す。

表4
通所介護利用者の認知記憶機能

			要支援・要介護1		要介護2～要介護5		該当率の差
			人数	%	人数	%	%
	見当識(時間、場所の認識) *	1.理解している	375	40.5	103	13.0	27.4
		2.言えば理解できる	493	53.2	408	51.7	28.9
		3.言ってもわからない	59	6.4	279	35.3	
	自分の意思を他者に伝える *	1.できる	638	68.8	290	36.7	32.1
		2.ときどき困難	263	28.3	349	44.1	16.3
		3.できない	27	2.9	152	19.2	
	他者の話を理解する *	1.できる	438	47.7	159	20.2	27.5
		2.ときどき困難	455	49.5	447	56.7	20.3
		3.できない	26	2.8	182	23.1	
	感情を表現する *	1.できる	701	76.4	411	52.6	23.8
		2.ときどき困難	201	21.9	279	35.7	10.0
		3.できない	15	1.6	91	11.7	
	よくみられる表情 *	1.笑い	668	71.1	539	66.7	4.4
	(複数選択可) *	2.怒り	185	19.7	299	37.0	-17.3
	*	3.悲しみ	130	13.8	170	21.0	-7.2
	*	4.無関心	234	24.9	287	35.5	-10.6
	*	5.落ち着き	277	29.5	183	22.7	6.9
	*	6.苦痛	69	7.4	104	12.9	-5.5
	会話のなかでの話題の持続性 *	1.かなり持続できる	323	35.4	108	14.2	21.2
		2.少し持続できる	462	50.7	342	45.0	26.9
		3.すぐに変わってしまう	127	13.9	310	40.8	
	出来事の記憶持続 *	1.覚えていることが多い	447	49.2	173	22.2	27.1
	(10分程度)	2.覚えていることがある	277	30.5	233	29.8	27.8
		3.すぐ忘れる	184	20.3	375	48.0	
	出来事の記憶持続 *	1.覚えていることが多い	269	29.8	91	11.8	18.0
	(2時間程度)	2.覚えていることがある	310	34.3	166	21.5	30.9
		3.すぐ忘れる	324	35.9	516	66.8	
	出来事の記憶持続 *	1.覚えていることが多い	114	12.7	48	6.2	6.5
	(1週間程度)	2.覚えていることがある	331	36.8	136	17.6	25.8
		3.すぐ忘れる	454	50.5	591	76.3	
	1日の中の気分の変動 *	1.少ない	710	76.6	406	51.8	24.8
		2.変動しやすい	192	20.7	276	35.2	10.3
		3.変動が大きい	25	2.7	102	13.0	
	30分程度の我慢 *	1.我慢できる	680	76.4	318	42.3	34.1
	(点滴・歯医者など)	2.できることもある	180	20.2	280	37.3	17.0
		3.できない	30	3.4	153	20.4	
	環境の変化への対応 *	1.適応できることが多い	422	46.3	188	24.2	22.2
		2.少し混乱しやすい	456	50.1	474	60.9	11.3
		3.激しく混乱する	33	3.6	116	14.9	

*:p<.05

注 該当率の差は軽度の該当率－中度以上の該当率。
該当率の差が2段書になっている項目は、上段が選択肢1への該当率の差、下段が選択1＋2の該当率への差を示している。「よく見られる表情」については、各表情ごとの該当率の差を示す。

表5
通所介護利用者の活動性

			要支援・要介護1		要介護2～要介護5		該当率の差
			人数	%	人数	%	%
活動性	自発的な活動性 *	1.よく動く	358	38.8	243	30.9	7.9
		2.少し動く	410	44.4	300	38.1	14.2
		3.ほとんど動かない	155	16.8	244	31.0	
	全般的な意欲・活力 *	1.いつも意欲がある	239	26.0	110	13.9	12.0
		2.意欲が低いときがある	580	63.0	407	51.5	23.5
		3.ほとんどない	102	11.1	273	34.6	
	集団活動への参加 *	1.自発的に参加	281	30.3	116	14.8	15.4
		2.促せば参加	617	66.4	550	70.2	11.6
		3.参加しない	31	3.3	117	14.9	
	個人作業への参加 *	1.自発的に参加	229	24.8	87	11.1	13.7
		2.促せば参加	631	68.2	520	66.1	15.9
		3.参加しない	65	7.0	180	22.9	
	作業の模倣(ものまね)ができる *	1.まねしてできる	574	63.3	248	31.9	31.4
		2.まねをするが困難	249	27.5	322	41.4	17.5
		3.まねをしない	84	9.3	208	26.7	
	健康への関心 *	1.高い	139	15.2	58	7.4	7.8
		2.ふつう	451	49.3	188	24.0	33.1
		3.少ない	204	22.3	161	20.6	34.9
		4.わからない	120	13.1	376	48.0	
	ご本人の生活の希望や目標 *	1.明確で、回りも理解している	313	35.2	138	18.1	17.1
		2.あるようだが、周りは理解していない、しづらい	299	33.6	208	27.3	23.4
		3.わからない、聞いたことがない	278	31.2	416	54.6	
参加している活動	調査日に参加した活動 *	1.健康維持・体操	797	84.9	601	74.4	10.5
	(複数回答可) *	2.ゲーム(体をつかう・頭をつかう)	698	74.3	516	63.9	10.5
	*	3.創作・手芸	284	30.2	174	21.5	8.7
		4.音楽(聴く・歌う・踊る)	492	52.4	416	51.5	0.9
	*	5.会話・語らい	710	75.6	521	64.5	11.1
		6.園芸・耕作	18	1.9	14	1.7	0.2
		7.家事・炊事	61	6.5	38	4.7	1.8
		8.散策・外出	90	9.6	89	11.0	−1.4
		9.その他	41	4.4	51	6.3	−1.9
好きな活動	ご本人が好きな活動 *	1.健康維持・体操	372	39.6	219	27.1	12.5
	(複数回答可) *	2.ゲーム(体をつかう・頭をつかう)	429	45.7	287	35.5	10.2
	*	3.創作・手芸	232	24.7	138	17.1	7.6
		4.音楽(聴く・歌う・踊る)	373	39.7	31	41.0	−1.3
	*	5.会話・語らい	596	63.5	354	43.8	19.7
	*	6.園芸・耕作	92	9.8	45	5.6	4.2
		7.家事・炊事	70	7.5	43	5.3	2.1
		8.散策・外出	186	19.8	163	20.2	−0.4
		9.その他	44	4.7	75	9.3	−4.6

*:p<.05

注 該当率の差は軽度の該当率－中度以上の該当率。
該当率の差が2段書になっている項目は、上段が選択肢1への該当率の差、下段が選択1＋2の該当率への差を示している。同様に3段書になっている項目では、上段が選択肢1への該当率の差、中断が選択肢1＋2の該当率の差、下段が選択肢1＋2＋3の該当率の差を示している。
参加している活動、好きな活動は各項目に対する該当率の差を示している。

厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）
分担研究報告書

認知症対応型共同生活介護事業所における軽度認知症利用者の状態像に関する研究

分担研究者　阿部哲也（認知症介護研究・研修仙台センター）
主任研究者　内藤佳津雄（日本大学文理学部）

研究要旨

本研究では、認知症介護対応型共同生活事業所における軽度認知症高齢者の状態像を明らかにし、今後の介護モデル作成するための基礎資料とすることを目的として、利用者の状態像について観察した結果を収集した。2854 名分の結果を収集し、軽度群 1477 例と中等度以上群 1377 例に分けて比較した。

その結果、軽度認知症高齢者の状態像は中等度以上の認知症高齢者と比べて、ほとんどの項目について平均的には自立性が高かったが、認知症による認知記憶障害やＢＰＳＤがみられる利用者も相当数おり、現行の介護予防サービスの適用が即可能であるとは言えないと考えられた。認知症による認知記憶障害やそれによる生活や行動上の障害に配慮しながら、身体機能や生活機能の自立を高める働きかけが有効である可能性が高いと考えられる。状態像の幅があることから、個人差に配慮した介護モデルを構築しなければならない。

A.　研究目的

本研究では、認知症対応型共同生活介護事業所における軽度認知症高齢者の状態像を明らかにし、今後の介護モデル作成のための基礎資料とすることを目的とした。

B.　研究方法

（１）調査対象者

2006 年 1 月時点において、WAM NET に登録されている全国の認知症対応型共同生活介護事業所からランダムに 2500 か所を抽出し、他の調査（事業所調査、職員調査）とともに郵送で調査を依頼した。利用者調査については 4 部を同封し、各事業所において介護１かつ認知症自立度ⅠまたはⅡの者を 3 名(軽度認知症利用者)、要介護２・３かつ認知症自立度Ⅲ以上の者を 1 名(中等度以上認知症利用者)利用者の中からランダムに選定してもらい、ある特定の調査日における利用者の様子を中心に観察した結果を職員に記入してもらった。ただし、該当する条件の利用者が指定の人数分そろわない場合には、適宜人

数を振り分けてもよいこととした(合計10000名分)。

（2）調査項目

①調査対象者の基本属性（性別、年齢、)、②ＡＤＬおよびＩＡＤＬに関する項目、③ＢＰＳＤに関する項目、④認知記憶機能に関する項目、⑤活動性に関する項目、⑥事業所での活動の6つの内容に関する項目について調査を行った。

（3）調査手続き

調査対象者で述べたような方法で事業所に対して郵送で調査を依頼した。記入した調査票は他の調査とともに、返信用封筒で返送してもらった。

（4）調査期間

平成18年2月

（5）データ処理及び分析方法

①要介護1を軽度認知症群、要介護2以上を中等度以上認知症群に分類した。②項目ごとに選択肢への該当者の比率の違いについてカイ二乗検定を行うとともに、選択肢下の該当者の比率の差の値を求めた。③各項目について、軽度群と中等度以上群の比較を行った。特にＢＰＳＤについては、行動障害や精神症状が「よくある」に該当する割合、「よくある」＋「ときどきある」に該当する割合について、両群の比較を行い、その差のパターンに着目して分類した。

記述統計、クロス集計、カイ二乗検定にはWindows版SASシステムver8.02を用いた。

（倫理面への配慮）

本研究における倫理面の配慮としては、調査票は無記名であり、個人情報を特定する情報は含まれていないこと、個人情報を含む記録からの転記ではなく、調査日における観察を元にした記入であることを明記した。

C. 研究結果・考察

本研究では、認知症対応型共同生活介護事業所の利用者を対象として、軽度認知症群と中等度以上認知症群の平均的状態像を把握し、比較することによって、軽度認知症群の特徴を明らかにするため、以下のように結果を分析し、あわせて考察を行った。

1　対象者の基本属性

（1）分析対象者

対象事業所2500事業所のうち915事業(回収率36.6%）より回答があり、回収された利用者調査票は2854名分（回収率28.5%）であった。

今回の分析では、要介護1と要介護2以上の2群に分け、それぞれを軽度認知症群（1477名)、中等度以上認知症群（1377名）として比較を行った。

（2）性別

軽度認知症群では男性16.9%、女性82.7%、未記入0.4%、中等度以上認知症群では男性21.2%、女性78.3%、未記入0.5%であった。

男女の割合の差は、軽度群が中等度以上群よりもやや小さくなった。

（3）年齢

利用者の平均年齢は軽度認知症群では83.0歳（SD6.6)、中等度以上認知症群では83.8歳（SD6.7）であった。

（4）認知症高齢者自立度／障害老人自立度

認知症高齢者自立度、障害老人自立度については表1のとおりであった。

（5）認知症のタイプ

軽度認知症群ではアルツハイマー型34.5%、脳血管性28.3%、その他20.0%、不明・特定できず17.2%であった。中等度以上認知症群ではアルツハイマー型42.8%、脳血管性29.9%、その他17.2%、不明・特定でき

ず10.1%であった。

（6）まとめ

対象者の基本属性については、軽度認知症群と中等度認知症群にみられた差は全ての項目においてわずかであった。

2　利用者のADL／IADL

（1）麻痺のある箇所（左・右、上・下肢）

軽度認知症群では「麻痺あり」6.2%、「麻痺なし」93.8%であった。中等度以上認知症群では「麻痺あり」12.1%、「麻痺なし」87.9%であった。

軽度認知症群、中等度認知症群ともに「麻痺あり」の割合は少なかった。しかし、軽度認知症群の「麻痺あり」（6.2%）と中等度認知症群の「麻痺あり」（12.1%）の割合を比較すると、軽度認知症群は中等度以上認知症群の約半分であった。

（2）日常に支障をきたす筋力低下

軽度認知症群では「筋力低下あり」27.1%「筋力低下なし」72.9%であった。中等度以上認知症群では「筋力低下あり」35.4%、「筋力低下なし」64.6%あった。

（3）視力の低下

軽度認知症群では「かなり見えにくい」4.9%、「やや見えにくい」32.1%、「見える」63.0%であった。中等度以上認知症群は「かなり見えにくい」7.3%、「やや見えにくい」33.2%、「見える」59.5%であった。

（4）聴力の低下

軽度認知症群では「かなり聞こえにくい」15.7%、「やや聞こえにくい」23.6%、「聞こえる」60.7%であった。中等度以上認知症群では「かなり聞こえにくい」14.7%、「やや聞こえにくい」28.6%、「聞こえる」56.8%であった。

（6）身体機能、感覚機能（まとめ）

筋力低下、視力の低下、聴力の低下については、軽度認知症群は中等度以上認知症群よりも低下がみられる割合が少なかった。しかし、その差は小さく、軽度認知症群、中等度以上認知症群ともにそれぞれの項目で（「筋力低下なし」「見える」「聞こえる」といった）低下の傾向が見られないとする回答が50%を超えていた。

（7）家の外での歩行・移動

軽度認知症群では「自立歩行」60.7%、「杖歩行」22.6%、「歩行器」9.0%、「車いす」7.7%であった。中等度以上認知症群では「自立歩行」53.2%「杖歩行」14.7%、「歩行器」7.6%、「車いす」24.5%であった。

「自立歩行」について軽度認知症群と中等度以上認知症群を比較すると、その差は7.5%と小さかった。「自立歩行」に「杖歩行」を加えると、軽度認知症群と中等度以上認知症群の差は15%を超えたが、「歩行器」については差はほとんどなかった。

また、軽度認知症群については「自立歩行」または「杖歩行」が80%を超えており、歩行の自立性が高かった。「車いす」の使用については、中等度以上認知症群で24.5%で、軽度認知症群の7.7%に比べ3倍以上多く、割合の違いが顕著であった。

（8）室内での歩行

軽度認知症群では「自立歩行」72.5%、「伝い歩き」6.5%、「杖歩行」11.2%、「歩行器」8.2%、「車いす」1.6%であった。中等度以上認知症群では「自立歩行」57.6%、「伝い歩き」11.3%、「杖歩行」11.3%、「歩行器」7.3%、「車いす」12.4%であった。「自立歩行」について軽度認知症群と中等度以上認知症群を比較すると、その差は14.9%であった。軽度認

知症群では70％以上が「自立歩行」と回答した。「伝い歩き」については軽度認知症群が中等度以上認知症群より少なかった。「杖歩行」では軽度認知症群と中等度以上認知症群の差はごくわずかであった。中等度以上認知症群でも「自立歩行」「伝い歩き」「杖歩行」いずれかと答えた割合は80.2％と高かったが、軽度認知症群では90％に達していた。「車いす」については軽度認知症群が 1.6％に対し、中等度以上認知症群は 12.4％と大きな差が見られた。

（９）歩行機能（まとめ）

家の外での歩行・移動と室内での歩行を比較すると、軽度認知症群が「自立歩行」または「杖歩行」と答えた割合は家の外では83.3％、室内では83.7％であった。中等度以上認知症群が「自立歩行」または「杖歩行」と答えた割合は家の外では67.9％、室内では68.9％であった。軽度群、中等度以上群のどちらも室内のほうがやや割合が高かった。

（１０）介助が必要な生活行為

この質問については複数回答を可能にし、介助が必要な項目全てを答えるようにした。介助が必要な人の割合は、軽度認知症群では「摂食」2.4％、「排泄」14.9％「入浴」45.6％、「洗身」50.9％であった。中等度以上認知症群では「摂食」16.0％、「排泄」55.7％、「入浴」73.4％、「洗身」75.8％であった。

軽度認知症群と中等度以上認知症群を比較すると、いずれの項目についても明らかに差があり、特に排泄行為が最も顕著な差がみられた。しかし、軽度認知症群でも「洗身」が50.9%、入浴45.6%であり、介助を必要としている人の割合が高い状態にあることが示された。

（10）家事（状態）について

軽度認知症群では「自分でしている」6.4％、「少ししている」52.7％、「ほとんど・全くしていない」40.9％であった。中等度以上認知症群では「自分でしている」2.5％、「少ししている」32.0％、「ほとんど・全くしていない」65.6％であった。「自分でしている」「少ししている」のいずれかであった割合は、軽度認知症群59.1％、中等度以上認知症群34.5％であり、軽度認知症群の自立度の高さが明らかになったと同時に、それでも4割はほとんどしていない状態にあるということが判明した。

（11）家事（能力）について

軽度認知症群では「自分でできる」15.0％、「少しできる」69.5％、「ほとんど・全くできない」15.5％であった。中等度以上認知症群では「自分でできる」5.2％、「少しできる」50.9％、「ほとんど・全くできない」44.0％であった。「自分でできる」「少しできる」については軽度認知症群が80％を超え、中等度以上認知症群でも半数を超えた。

（12）家事(まとめ)

家事の「状態」と「能力」を比較すると、「状態」では「自分でしている」「少ししている」は軽度認知症群59.1％、中等度以上認知症群34.5％であるのに対し、「能力」では「自分でできる」「少しできる」は軽度認知症群84.5％、中等度以上認知症群56.1％であることから、家事の能力と実際の実行状況には大きな違いがあり、「能力はあるが、実際は行っていない」利用者が25％程度いることがわかった。

（13）社会的手続や金銭管理（状態）

軽度認知症群では「自分でしている」7.2％、「少ししている」28.1％、「ほとんど・全くしていない」64.6％であった。中等度以上認知症群では「自分でしている」1.9％、「少しし

ている」8.9%、「ほとんど・全くしていない」89.2%であった。「自分でしている」「少ししている」を合わせると、軽度認知症群が35.3%、中等度以上認知症群が10.8%であり、差が認められた。

（14）社会的手続や金銭管理（能力）

軽度認知症群では「自分でできる」8.0%、「少しできる」39.9%、「ほとんど・全くできない」52.1%であった。中等度以上認知症群では「自分でできる」2.1%、「少しできる」13.8%、「ほとんど・全くできない」84.1%であった。「自分でできる」「少しできる」を合わせると、軽度認知症群が47.9%、中等度以上認知症群が15.9%であった。

（15）社会的手続や金銭管理（まとめ）

社会的手続や金銭管理の「状態」と「能力」を比較すると、能力の評価のほうがやや高いという結果であった。「能力はあるが、実際は行っていない」利用者は軽度認知症群で12%程度、中等度以上認知症群でも5%程度と軽度群の方が差が大きかった。

（16）更衣や整容の能力

軽度認知症群では「自分でできる」70.2%、「少しできる」28.6%、「ほとんど・全くできない」1.2%であった。中等度以上認知症群では「自分でできる」26.9%、「少しできる」52.5%、「ほとんど・全くできない」20.6%であった。「自分でできる」「少しできる」を合わせると、軽度認知症群98.8%、中等度認知症群79.4%と非常に高い割合となった。

（17）電話をかける能力

軽度認知症群では「自分でできる」28.6%、「少しできる」41.5%、「ほとんど・全くできない」29.9%であった。中等度以上認知症群では「自分でできる」8.1%、「少しできる」23.1%、「ほとんど・全くできない」68.9%であった。「自分できる」「少しできる」を合わせると、中等度以上認知症群では31.1%であったのに対して軽度認知症群では70.1%と非常に高い割合であった。

3　BPSD等

BPSD等については、それぞれの項目について軽度認知症群と中等度以上認知症群の差のパターンを比較し、A～Dの4つのタイプに分類した。

①Aタイプ:「よくある」の割合の差も若干あるが、「ときどきある」割合の差が大きい項目群

「よくある」では軽度群と中等度以上群の差が10%程度以下で、「よくある」「ときどきある」を合わせるとその差は20%以上と大きくなる。中等度以上でも「よくある」への該当者がそれほど多くない項目である。軽度群でも該当者の割合は10%程度である。

Aタイプには「排泄物をさわる」、「昼夜が逆転している」の2項目が該当した。

（1）排泄物をさわる

軽度認知症群では「よくある」0.8%、「ときどきある」3.0%、「ない」96.3%であった。中等度以上認知症群では「よくある」5.5%、「ときどきある」18.4%、「ない」76.1%であった。

（2）昼夜が逆転している

軽度認知症群では「よくある」2.0%、「ときどきある」11.7%、「ない」86.3%であった。中等度以上認知症群では「よくある」9.5%、「ときどきある」28.6%、「ない」61.9%であった。

②Bタイプ:「よくある」の割合の差が大きく、「ときどきある」割合の差が小さい（が軽度の方が少ない）項目群

「よくある」で軽度群と中等度以上群との差が 15%程度以上あり、「ときどきある」は軽度群の割合が若干低いので、合わせた差が 20～30%程度となる。軽度群でも 20～40%程度と該当率が高い。

Bタイプには「歩き回る」「家族の顔を忘れる」「トイレなどの場所を忘れる」の3項目が該当した。

（1）歩き回る

軽度認知症群では「よくある」6.6%、「ときどきある」12.9%、「ない」80.6%であった。中等度以上認知症群では「よくある」28.7%、「ときどきある」22.4%、「ない」48.9%であった。

（2）家族の顔を忘れる

軽度認知症群では「よくある」2.1%、「ときどきある」11.1%、「ない」86.8%であった。中等度以上認知症群では「よくある」18.3%、「ときどきある」24.9%、「ない」56.8%であった。

（3）トイレなどの場所を忘れる

軽度認知症群では「よくある」2.9%、「ときどきある」12.7%、「ない」84.4%であった。中等度以上認知症群では「よくある」27.8%、「ときどきある」24.4%、「ない」47.8%であった。

③Cタイプ：「よくある」の割合が中等度以上群で大きく、「ときどきある」の割合は軽度群の方が割合が大きい項目群

「よくある」では10%以上中等度以上群の方が割合が大きいが、「ときどきある」は逆転しているため、累積の割合では10%程度になっている。軽度であっても該当率が高い項目群であり、70%程度が該当する。

Cタイプには「情緒不安定」「同じ話を繰り返す」「職員の顔と名前を忘れる」の3つが該当した。

（1）情緒不安定

軽度認知症群は「よくある」15.7%、「ときどきある」49.4%、「ない」34.9%であった。中等度以上認知症群では「よくある」30.6%、「ときどきある」45.7%、「ない」23.8%であった。

（2）同じ話を繰り返す

軽度認知症群では「よくある」31.7%、「ときどきある」33.9%、「ない」34.3%であった。中等度以上認知症群では「よくある」39.8%、「ときどきある」29.0%、「ない」31.2%であった。

（3）職員の顔と名前を忘れる

軽度認知症群では「よくある」25.1%、「ときどきある」41.2%、「ない」33.7%であった。中等度以上認知症群では「よくある」49.6%、「ときどきある」31.4%、「ない」19.1%であった。

④Dタイプ：「よくある」も「ときどきある」ともに差が小さく、累積割合の差も小さい項目群

「よくある」の差が10%未満で、「よくある」＋「ときどきある」の累積割合の差も20%に達しない。被害妄想、暴言、家に帰りたがる、作り話は軽度群でも該当者が 20～30%程度に達するが、それ以外は中等度以上群でも該当率が低く、軽度群でも該当率が小さい項目である。

Dタイプは9つの「被害妄想」「暴言」「暴力行為」「大声・奇声を上げる」「家に帰りたがる」「作り話をする」「異食をする」「他人のものを収集する」「ものを壊す」設問が該当した。

（1）被害妄想

軽度認知症群では「よくある」14.1%、「ときどきある」34.3%、「ない」51.6%であった。中等度以上認知症群では「よくある」24.0%、「ときどきある」36.0%、「ない」40.0%であった。

（2）暴言

軽度認知症群では「よくある」7.3%、「ときどきある」24.1%、「ない」68.6%であった。中等度以上認知症群では「よくある」14.7%、「ときどきある」34.9%、「ない」50.5%であった。

（3）暴力行為

軽度認知症群では「よくある」1.0%、「ときどきある」9.8%、「ない」89.2%であった。中等度以上認知症群では「よくある」5.8%、「ときどきある」21.0%、「ない」73.3%であった。

（4）大声・奇声を上げる

軽度認知症群では「よくある」2.8%、「ときどきある」13.1%、「ない」84.1%であった。中等度以上認知症群では「よくある」11.0%、「ときどきある」24.1%、「ない」64.9%であった。

（5）家に帰りたがる

軽度認知症群では「よくある」11.7%、「ときどきある」25.5%、「ない」62.9%であった。中等度以上認知症群では「よくある」26.7%、「ときどきある」27.4%、「ない」45.9%であった。

（6）作り話をする

軽度認知症群では「よくある」9.8%、「ときどきある」19.4%、「ない」70.8%であった。中等度以上認知症群では「よくある」20.9%、「ときどきある」23.8%、「ない」55.3%であった。

（7）異食をする

軽度認知症群では「よくある」0.3%、「ときどきある」1.2%、「ない」98.6%であった。中等度以上認知症群では「よくある」3.1%、「ときどきある」11.5%、「ない」85.4%であった。

「ない」と答えた割合は軽度認知症群98.6%、中等度以上認知症群85.4%全体的に非常に高かった。

（8）他人のものを収集する

軽度認知症群では「よくある」3.6%、「ときどきある」9.0%、「ない」87.4%であった。中等度以上認知症群では「よくある」12.2%、「ときどきある」19.5%、「ない」68.3%であった。

（9）ものを壊す

軽度認知症群では「よくある」0.4%、「ときどきある」3.3%、「ない」96.3%であった。中等度以上認知症群では「よくある」3.4%、「ときどきある」11.3%、「ない」85.2%であった。

4　認知記憶機能

（1）見当識（時間、場所の確認）

軽度認知症群では「理解している」42.0%、「言えば理解できる」53.6%、「言ってもわからない」4.5%であった。中等度以上認知症群では「理解している」13.3%、「言えば理解できる」54.1%、「言ってもわからない」32.6%であった。軽度群は中等度以上群よりもかなり良好であった。

（2）自分の意思を他者に伝える

軽度認知症群では「できる」78.2%、「ときどき困難」21.2%、「できない」0.8%であった。　中等度以上認知症群では「できる」41.8%、「ときどき困難」43.2%、「できない」15.0%であった。軽度群は「できる」割合が

高かった。

（3）他者の話を理解する

軽度認知症群では「できる」57.6%、「ときどき困難」41.1%、「できない」1.3%であった。　中等度以上認知症群では「できる」26.8%、「ときどき困難」55.3%、「できない」17.9%であった。軽度群は「できる」割合が高かった。

（4）感情を表現する

軽度認知症群では「できる」84.4%、「ときどき困難」15.1%、「できない」0.6%であった。　中等度以上認知症群では「できる」61.0%、「ときどき困難」32.1%、「できない」6.9%であった。

軽度認知症群、中等度以上認知症群ともに「できる」「ときどき困難」の割合が高く、「できない」の割合は非常に低かった。

（5）よくみられる表情（複数回答可）

軽度認知症群では「1.笑い」75.6%、「2.怒り」44.2%、「3.悲しみ」29.8%、「4.無関心」21.7%、「5.落ち着き」34.0%、「6.苦痛」18.8%であった。中等度以上認知症群では「1.笑い」73.8%、「2.怒り」57.5%、「3.悲しみ」33.4%、「4.無関心」30.8%、「5.落ち着き」27.0%、「6.苦痛」21.7%であった。

選択肢の中では「笑い」が軽度認知症群（75.6%）、中等度以上認知症群（73.8%）ともに70%以上と最も多かった。

最も回答が少なかったのは「苦痛」で軽度認知症群18.8%、中等度以上認知症群21.7%であった。軽度群と中等度以上群で最も差がみられたのは「怒り」で、その差は13.3%で中等度以上の方が割合が高かった。

（6）会話のなかでの話題の持続性

軽度認知症群では「かなり持続できる」49.0%、「少し持続できる」42.7%、「すぐに変わってしまう」8.3%であった。中等度以上認知症群では「かなり持続できる」19.1%、「少し持続できる」44.0%、「すぐに変わってしまう」36.9%であった。

「少し持続できる」のみを比較すると、軽度群（42.7%）と中等度以上群（44.0%）の間の差はわずかであったが、「かなり持続できる」（軽度群49.0%、中等度以上群19.1%）や「すぐに変わってしまう」（軽度群8.3%、中等度以上群36.9%）を比較すると、差は非常に大きかった。

また、軽度認知症群では「少し持続できる」と「かなり持続できる」を合わせると90%を超えた。

（7）出来事の記憶持続（10分程度）

軽度認知症群では「覚えていることが多い」49.1%、「覚えていることがある」31.3%、「すぐ忘れる」19.6%であった。中等度以上認知症群では「覚えていることが多い」22.0%、「覚えていることがある」29.5%、「すぐ忘れる」48.6%であった。

（8）出来事の記憶持続（2時間程度）

軽度認知症群では「覚えていることが多い」31.6%、「覚えていることがある」33.5%、「すぐ忘れる」34.9%であった。中等度以上認知症群では「覚えていることが多い」11.5%、「覚えていることがある」24.0%、「すぐ忘れる」64.5%であった。

（9）出来事の記憶持続（1週間程度）

軽度認知症群では「覚えていることが多い」14.1%、「覚えていることがある」34.6%、「すぐ忘れる」51.3%であった。中等度以上認知症群では「覚えていることが多い」5.5%、「覚えていることがある」17.4%、「すぐ忘れる」77.1%であった。

出来事の記憶持続については、記憶の持続時間が長くなるほど軽度認知症群と中等度以上認知症群どちらも「すぐ忘れる」の割合が高くなるが、持続時間が長くなっても両者の差はあまり変化しなかった。

（１０）１日の中の気分の変動

軽度認知症群では「少ない」63.3％、「変動しやすい」30.1％、「変動が大きい」6.6％であった。中等度以上認知症群では「少ない」40.6％、「変動しやすい」41.0％、「変動が大きい」18.5％であった。

「変動しやすい」「変動が大きい」を合わせると軽度認知症群では36.7％、中等度以上認知症群では59.5％と差が認められた。

（１１）30分程度の我慢（点滴・歯医者など）

軽度認知症群では「我慢できる」75.3％、「できることもある」20.8％、「できない」3.9％であった。中等度以上認知症群では「我慢できる」40.8％、「できることもある」36.7％、「できない」22.5％であった。

軽度認知症群では「できない」は 3.9％と非常に低かったが、中等度以上認知症群では22.5％であった。

（１２）環境の変化への対応

軽度認知症群では「適応できることが多い」45.2％、「少し混乱しやすい」48.3％、「激しく混乱する」6.5％であった。中等度以上認知症群では「適応できることが多い」20.6％、「少し混乱しやすい」56.0％、「激しく混乱する」23.4％であった。

「少し混乱しやすい」「激しく混乱する」の合計は軽度認知症群では54.8％、中等度以上認知症群では 79.4％と差があったものの、ともに半数を超えた。

5　活動性

（１）自発的な活動性

軽度認知症群では「よく動く」42.3％、「少し動く」43.1％、「ほとんど動かない」14.6％であった。中等度以上認知症群では「よく動く」36.5％、「少し動く」41.9％、「ほとんど動かない」21.6％であった。

「よく動く」「少し動く」を合わせると、軽度認知症群 85.4％、中等度以上認知症群78.4％と差はそれほど大きくなかった。

（２）全般的な意欲・活力

軽度認知症群では「いつも意欲がある」26.2％、「意欲が低いときがある」62.7％「ほとんどない」11.1％であった。中等度以上認知症群では「いつも意欲がある」14.9％、「意欲が低いときがある」59.7％「ほとんどない」25.4％であった。「いつも意欲がある」割合に10％程度の差があった。

（３）集団活動への参加

軽度認知症群では「自発的に参加」24.8％、「促せば参加」68.3％、「参加しない」6.9％であった。中等度以上認知症群では「自発的に参加」11.4％、「促せば参加」72.8％、「参加しない」15.7％であった。

（４）個人作業への参加

軽度認知症群では「自発的に参加」28.7％、「促せば参加」63.4％、「参加しない」7.9％であった。中等度以上認知症群では「自発的に参加」12.2％、「促せば参加」67.1％、「参加しない」20.7％であった。

集団活動への参加と個人作業への参加の 2 項目については、軽度認知症群、中等度以上認知症群ともに高い割合で集団活動・個人作業に参加していた。とくに軽度認知症群では集団活動・個人作業ともに、90％以上が参加しているとの結果が得られた。集団作業と個人作業ともに、軽度と中等度以上で参加の割

合の差はそれほど大きくはなかったが、個人活動の方がやや差が大きくなっていた・

（5）作業の模倣（ものまね）ができる

軽度認知症群では「まねしてできる」72.8%、「まねをするが困難」17.7%、「まねをしない」9.5%であった。中等度以上認知症群では「まねしてできる」38.5%、「まねをするが困難」37.6%、「まねをしない」23.9%であった。

「まねしてできる」の割合が30%以上軽度の方が高く、軽度認知症と中等度以上認知症の違いの1つの特徴であると考えられる。

（6）健康への関心

軽度認知症群では「高い」31.0%、「ふつう」49.1%、「少ない」14.1%、「わからない」5.8%であった。中等度以上認知症群では「高い」13.3%、「ふつう」34.4%、「少ない」18.3%、「わからない」34.0%であった。軽度群の方が関心が高い傾向があった。

（7）本人の生活の希望や目標

軽度認知症群では「明確で、周りも理解している」58.8%、「あるようだが、周りは理解していない、しづらい」28.5%、「わからない、聞いたことがない」12.8%であった。中等度以上認知症群では「明確で、周りも理解している」30.3%、「あるようだが、周りは理解していない、しづらい」39.1%、「わからない、聞いたことがない」30.6%であった。「明確で、周りも理解している」割合が30%弱異なっており、軽度群では本人の生活の希望や目標が明確な者が多いことが示された。しかし、それでも4割以上は不明確という結果でもあり、介護予防の実施に際して重視される希望や目標の共有について、課題があることが示された。

6　調査日に参加した活動

軽度認知症群では「健康維持・体操」55.1%、「ゲーム」28.0%、「創作・手芸」15.5%、「音楽（聴く・歌う・踊る）」43.3%、「会話・語らい」76.6%、「園芸・耕作」4.5%、「家事・炊事」52.2%、「散策・外出」31.7%、「その他」8.4%であった。中等度以上認知症群では「健康維持・体操」49.8%、「ゲーム」27.4%、「創作・手芸」8.6%、「音楽（聴く・歌う・踊る）」46.3%、「会話・語らい」70.0%、「園芸・耕作」2.8%、「家事・炊事」32.1%、「散策・外出」27.4%、「その他」7.3%であった。

軽度認知症群、中等度以上認知症群ともに「健康維持・体操」「音楽（聴く・歌う・踊る）」「会話・語らい」への参加が多かった。

7　本人が好きな活動

軽度認知症群では「健康維持・体操」36.4%、「ゲーム」27.6%、「創作・手芸」23.1%、「音楽（聴く・歌う・踊る）」44.8%、「会話・語らい」63.2%、「園芸・耕作」16.9%、「家事・炊事」37.9%、「散策・外出」52.4%、「その他」12.7%であった。中等度以上認知症群では「健康維持・体操」26.2%、「ゲーム」23.5%、「創作・手芸」15.0%、「音楽（聴く・歌う・踊る）」49.8%、「会話・語らい」54.2%、「園芸・耕作」11.6%、「家事・炊事」25.0%、「散策・外出」42.1%、「その他」9.1%であった。

D　結論

本研究では、認知症対応型共同生活介護事業所（グループホーム）における軽度認知症高齢者と中等度以上認知症高齢者それぞれの平均的状態像が明らかになった。また、その比較を通して軽度認知高齢者に対する効果的な介護サービスの技法モデルを確立するための基礎資料とすることができた。

軽度認知症群では、ほとんどの項目において中等度以上認知症群と比べて、全体的に認知記憶機能が高く、コミュニケーションが良好であり、生活上の自立が高いという結果であった。しかし、家事や社会的手続きについては持っている能力の評定が、現在の実行状況よりも高く、いろいろなことができる能力があるにもかかわらず、それを活かす状態にない場合もあり、生活の自立を高める余地があり得ることが窺われた。

ＢＰＳＤについても全体的に軽度認知症群の方が該当者の割合が小さかったが、項目によって該当率の違いがあり、症状緩和のためには中等度以上との違いも含め、軽度認知症に特徴的な項目に重点を置いて考慮すべきであろう。

記憶やコミュニケーションの能力も全体としては中等度以上に比べれば高い傾向であったが、やや困難な状態にある利用者も20～40％程度おり、認知記憶機能やコミュニケーションの低下の個人差に配慮しなければならないと考えられる。活動性や意欲についても、全体的には中等度と比べてやや高かった。しかし、自発的な者は20～30％程度であり、促すことが必要であり、意欲や活力向上への働きかけが重要であると考えられる。

軽度認知症高齢者の状態像は中等度と比べて、自立性が高いものの、即現行の介護予防サービスの適用が可能であるとは言えないものであった。しかし、認知症による諸症状は中等度以上とは異なって、全体的に自立度が高かったことから、軽度認知症による認知記憶障害やそれによる生活や行動上の障害の特徴に配慮しながら、身体機能や生活機能の自立を高める働きかけは、有効である可能性が高いと考えられる。しかし、状態像の幅があることから、個人差に配慮した介護モデルを構築することが必要である。

表1
解析対象者(認知症対応型共同生活介護事業所)の基本属性

			要介護1		要介護2～要介護5	
			人数	%	人数	%
基本属性	要介護度	要介護1	1477	100.0	0	0.0
		要介護2	0	0.0	595	43.2
		要介護3	0	0.0	568	41.3
		要介護4・5	0	0.0	214	15.5
		合計	1477		1377	
	性別	男	250	16.9	292	21.2
		女	1221	82.7	1078	78.3
		記入なし	6	0.4	7	0.5
	平均年齢 (SD)		83.0 (6.6)		83.8 (6.7)	
	認知症高齢者自立度	Ⅰ	358	25.9	78	6.3
		Ⅱ	888	64.3	341	27.4
		Ⅲ	119	8.6	559	44.8
		Ⅳ	16	1.2	233	18.7
		M	1	0.1	36	2.9
	障害老人自立度	自立	135	11.1	69	6.3
		J	381	31.2	182	16.6
		A	676	55.3	622	56.8
		B	29	2.4	182	16.6
		C	1	0.1	40	3.7
	認知症のタイプ	1.アルツハイマー型の認知症	479	34.5	550	42.8
		2.脳血管性の認知症	392	28.3	384	29.9
		3.その他	277	20.0	221	17.2
		4.不明・特定できず	239	17.2	130	10.1